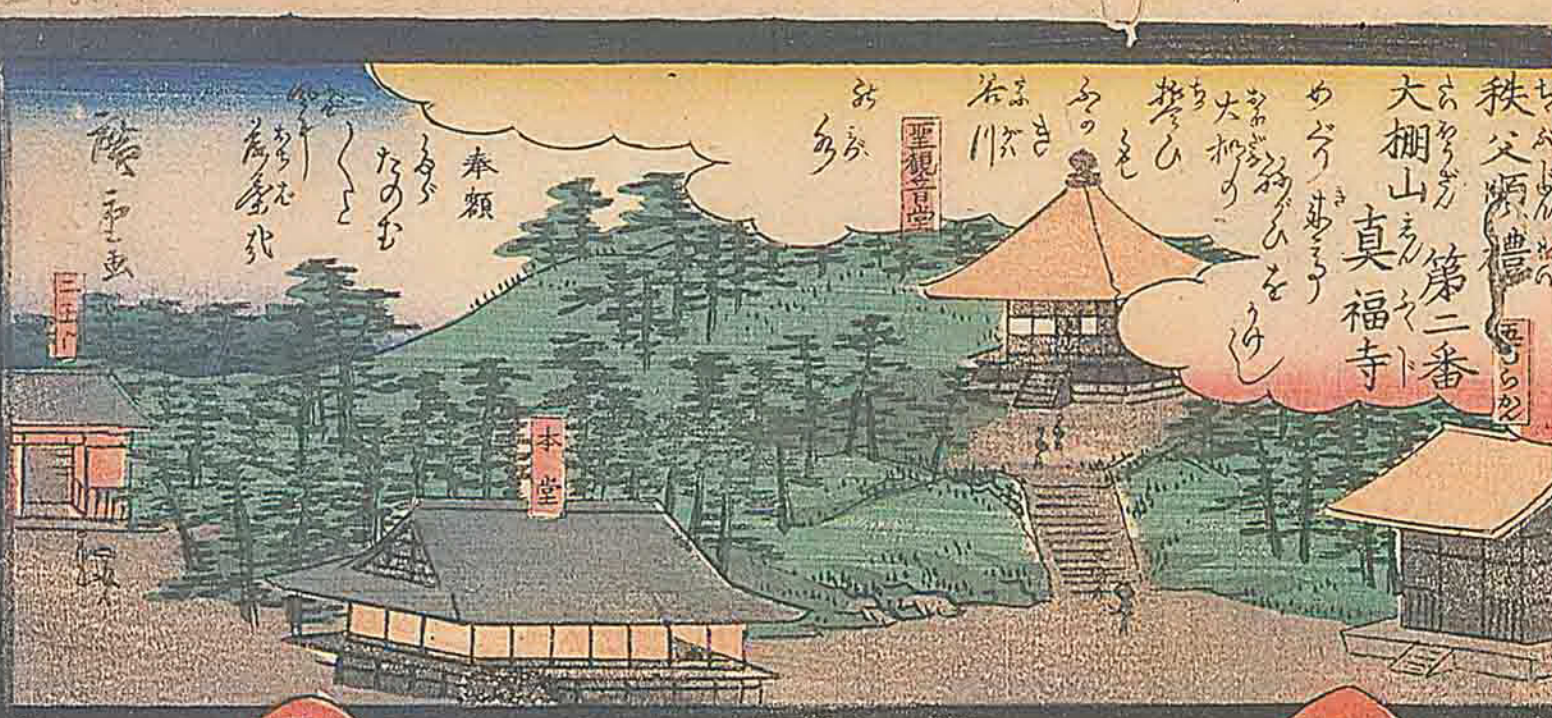


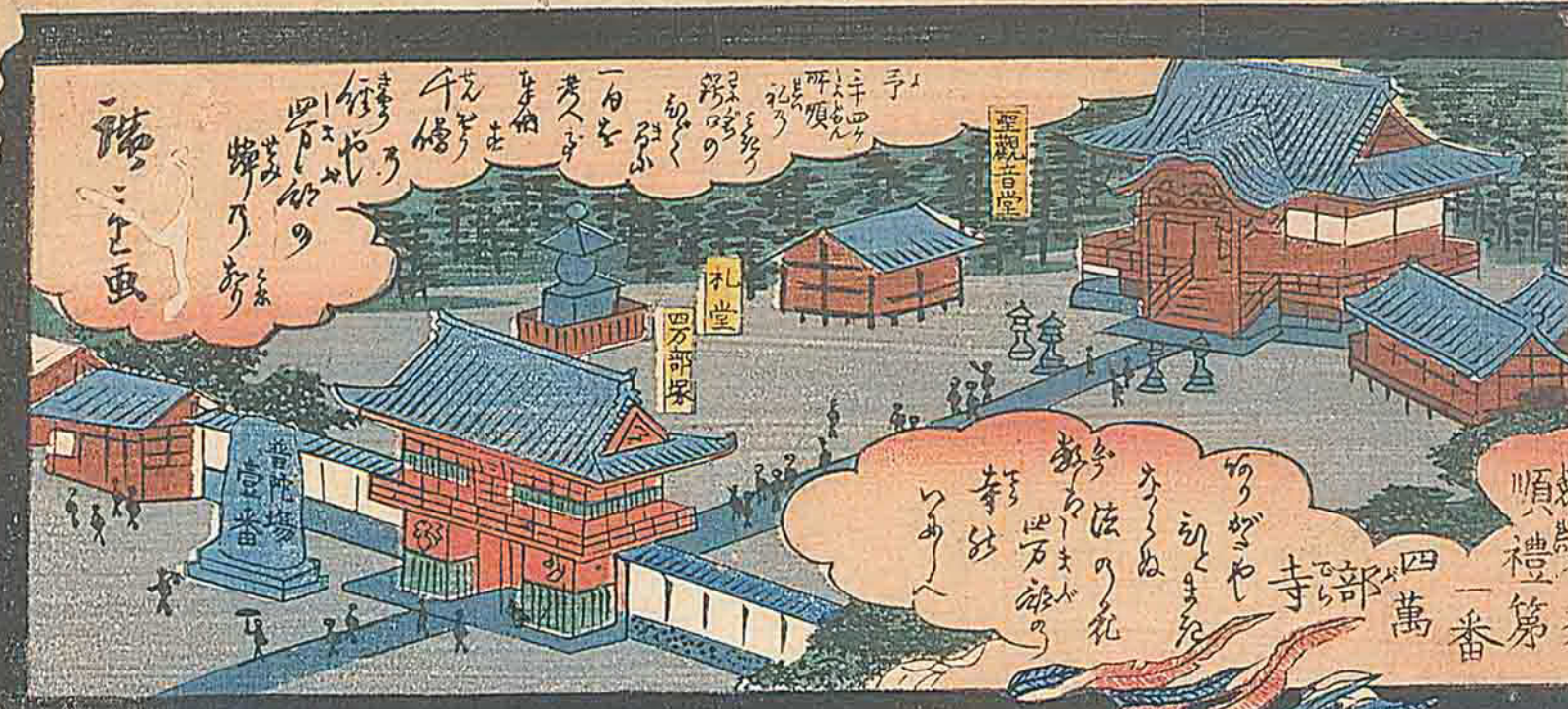


20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

觀音靈驗記

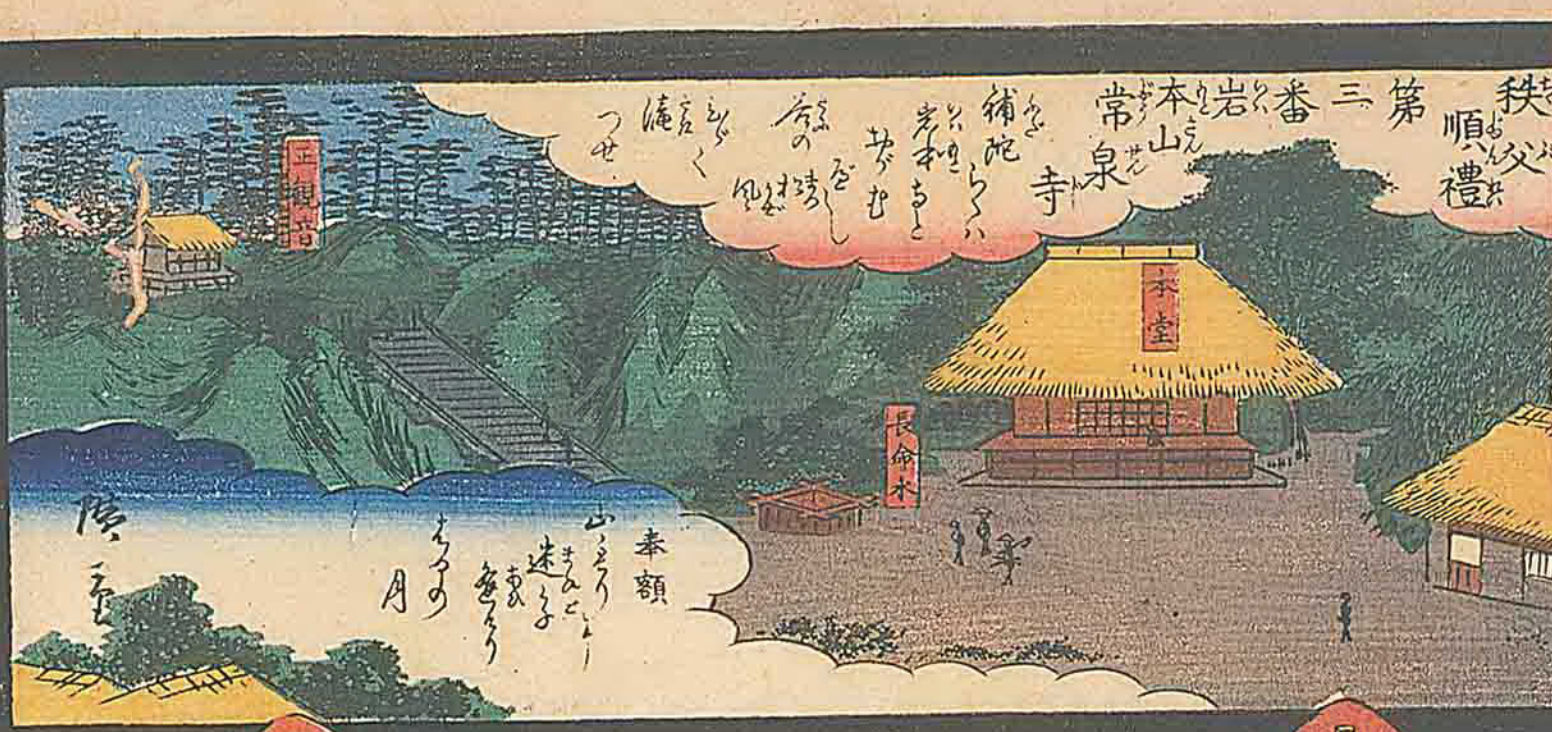


觀音靈驗記



西國色

觀音靈驗記



觀音靈驗記

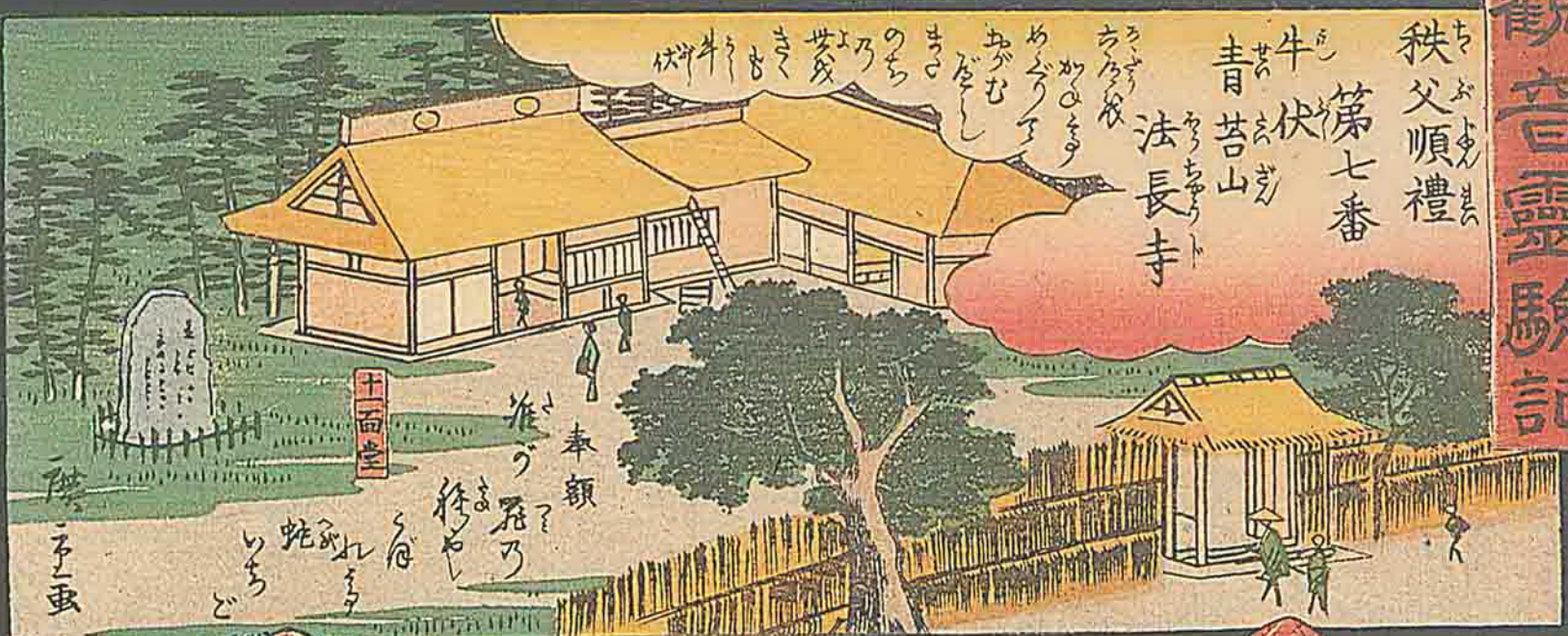


觀音靈驗記

秩父順禮

第七番

牛伏 法長寺



花蘭左衛門督長臣某

永平の頃當郡末野の郷花蘭の城主某
在衛門督の長臣某ハ放逸邪惡の者
ありしが相馬將門の謀逆ハ子
天慶三年官軍ハ攻ラシメ山林
そのひが終ニ死シ愛ハ一僧
當寺の觀音を携ヘテ其辺
兵亂を避テ居ラセ長臣の
體を埋ム其後平穩ニシテ逃
去シ土民等々々住家ハ飯多ク
其長臣の妻子ハ縁家ハ飯多ク
夫の行衛を捜セハ僧死
其時々々諸々縁家の牛
牘を産メラ横此妻子を
慕フタ一日かの
塚へ牽連シ
塚の前ハ膝
流シ人語を
汝ケ夫あり惡心の報メナク
牛とある何卒妻子との出家とあり
る觀音を供養セハ必を得脱せん
即座ハ髪を剃ラテ尼トアリ夫の惡報を
觀音ハ祈リテ終ニ生



萬亭應賀誌

國重四
横川彫竹

聖衆ハ生トハ
うぎの冥
驗あり

觀音靈驗記

順禮第八番

三善寺



念佛

寺の本尊

惠心僧都
作メ又弥陀の
尊モアリ今ハ
三尊モアリ今ハ
兵亂屢ハアリ
佛閣ハ廢衰セシ
人ハ旅僧来リ
里ハハハハハ
當寺ハ詠哥ハ何
聞タレバ取リ
大音ハ節をツ
如ク面白ク
順禮セハ
佛ハ忘ラ
應化ハ在セ

念佛
寺の本尊
惠心僧都
作メ又弥陀の
尊モアリ今ハ
三尊モアリ今ハ
兵亂屢ハアリ
佛閣ハ廢衰セシ
人ハ旅僧来リ
里ハハハハハ
當寺ハ詠哥ハ何
聞タレバ取リ
大音ハ節をツ
如ク面白ク
順禮セハ
佛ハ忘ラ
應化ハ在セ



萬亭

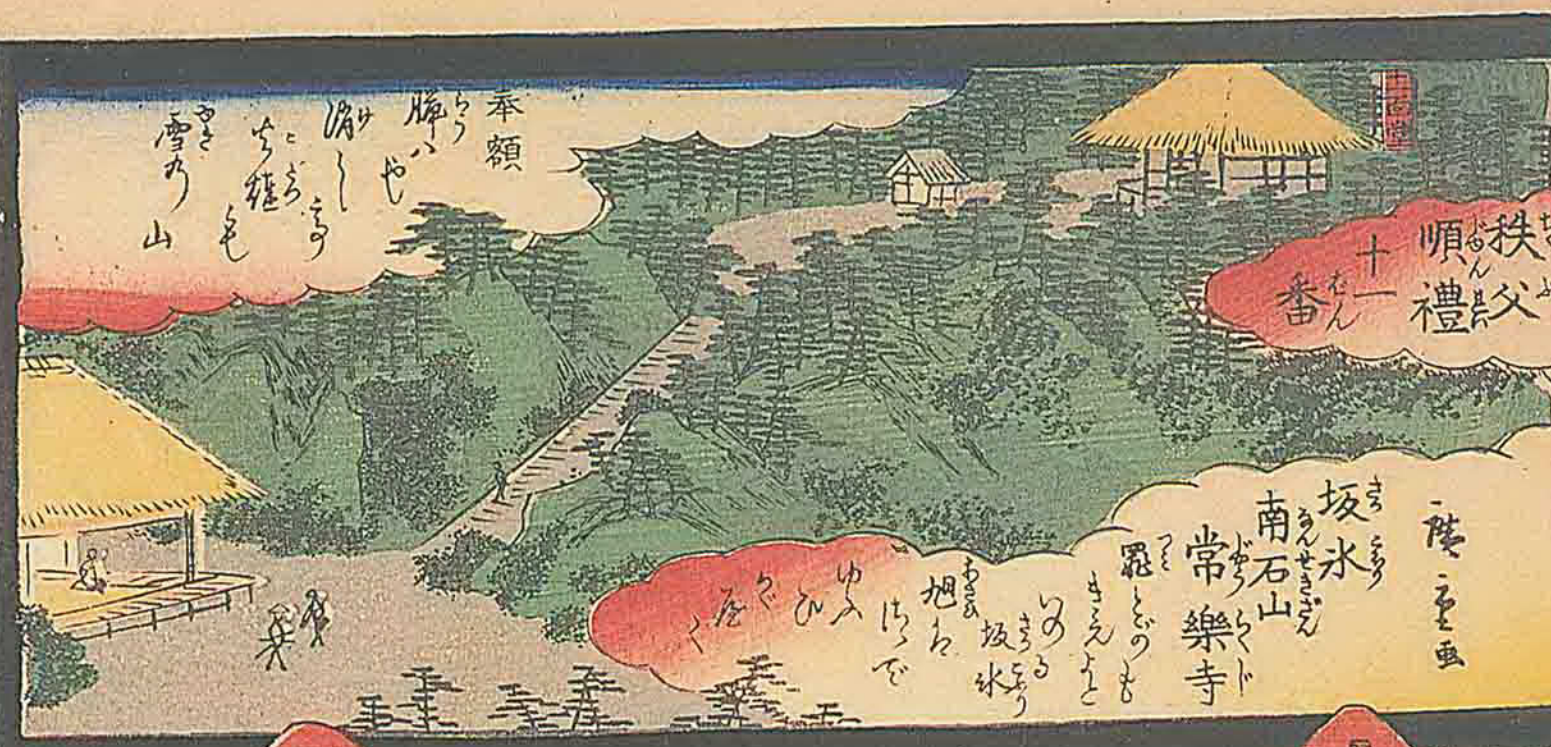
應賀誌

又間ハ
泰平と云ハ
まさト不思議
冥驗あり

曲玉園

彫竹

觀音靈驗記



住持門海

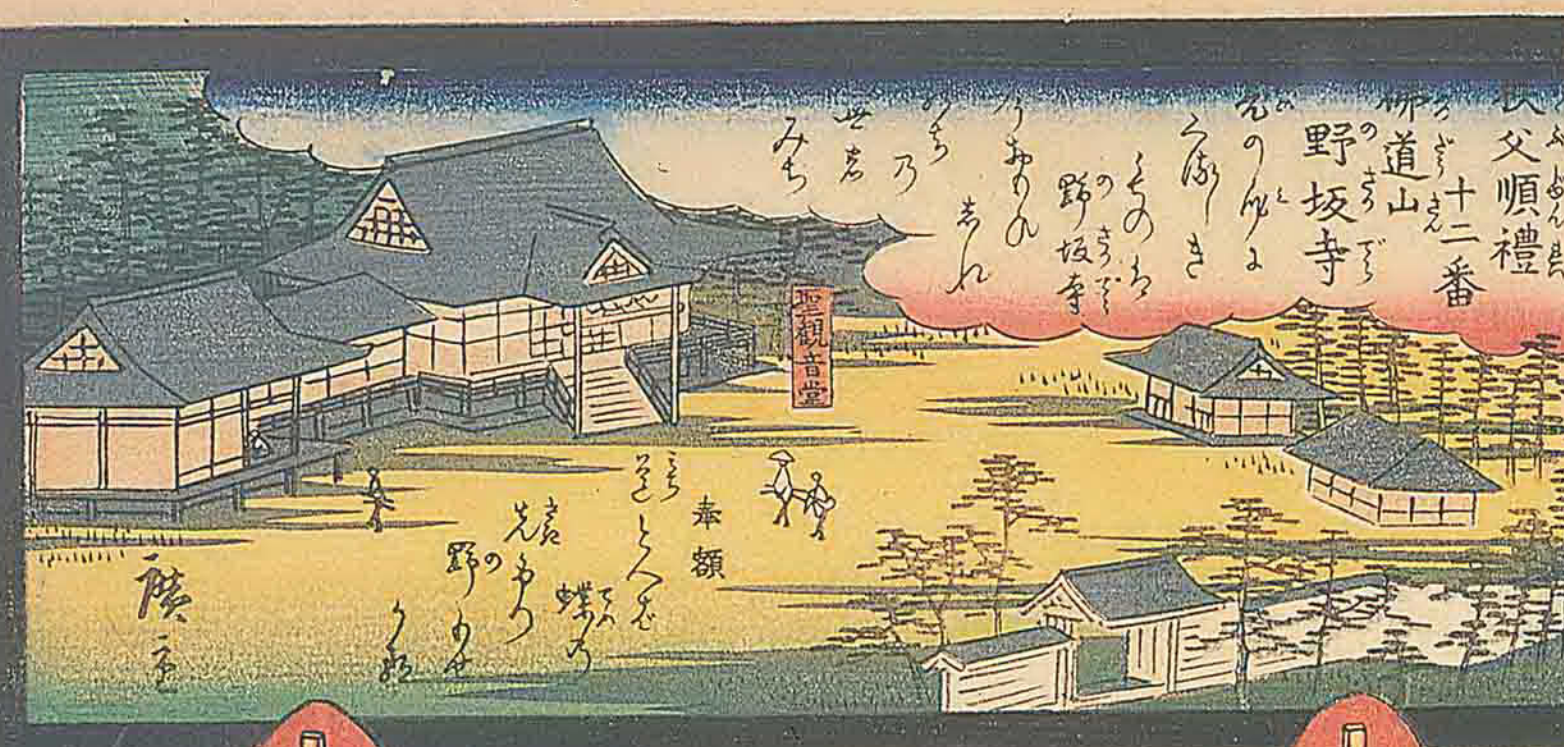
門海も智徳勝なる聖山當山よ
二王門を建立せしるの普請なりをふ
邪氣に犯れしを臥す本尊ふ
そのく 験もなり本尊ふ
快氣を祈念しるが夜夢中
貴僧来りて吾より汝が邪氣を
治りせんと宣ふ
ふきと其坐へ
金剛神の
われを門海の
手を採て
引き
と思へ
夢覚
ぬきの
翌日より
忽ち平愈しる本尊を
いよく信心しる猶數多の灵驗を蒙り
長寿を得たると偏に當寺の利益をばとるありん

万亭應賀誌



聖徳太子

觀音靈驗記



甲斐の商人

往昔甲斐の
國の商人
某
者ある
所を
通路
ける時山賊
とも五六人立
出て着類を剥
久後の禍をうん為
引捕らる切殺さんとし
ける商人の連中叶ふ命と
唯一信の南無觀世音と唱へる
肌の守のうらり光明電の如く
輝きわたる山賊も眼を射られて
用く正の法は是より立所ふ盜を
取らるの法返して他言はるは眼の
けつたるも三四人の逃去りし頭人
併罰は恐るなりと遊世しく遊ぶ住りる

万亭應賀誌



▲うちめ商人古舞より
聖徳太子の作りあみ
觀音の像を持
来さば
共ふ力を
合せし當
野の堂を建り
今の本尊
則ちあり

南傳貳山在板

観音靈驗記

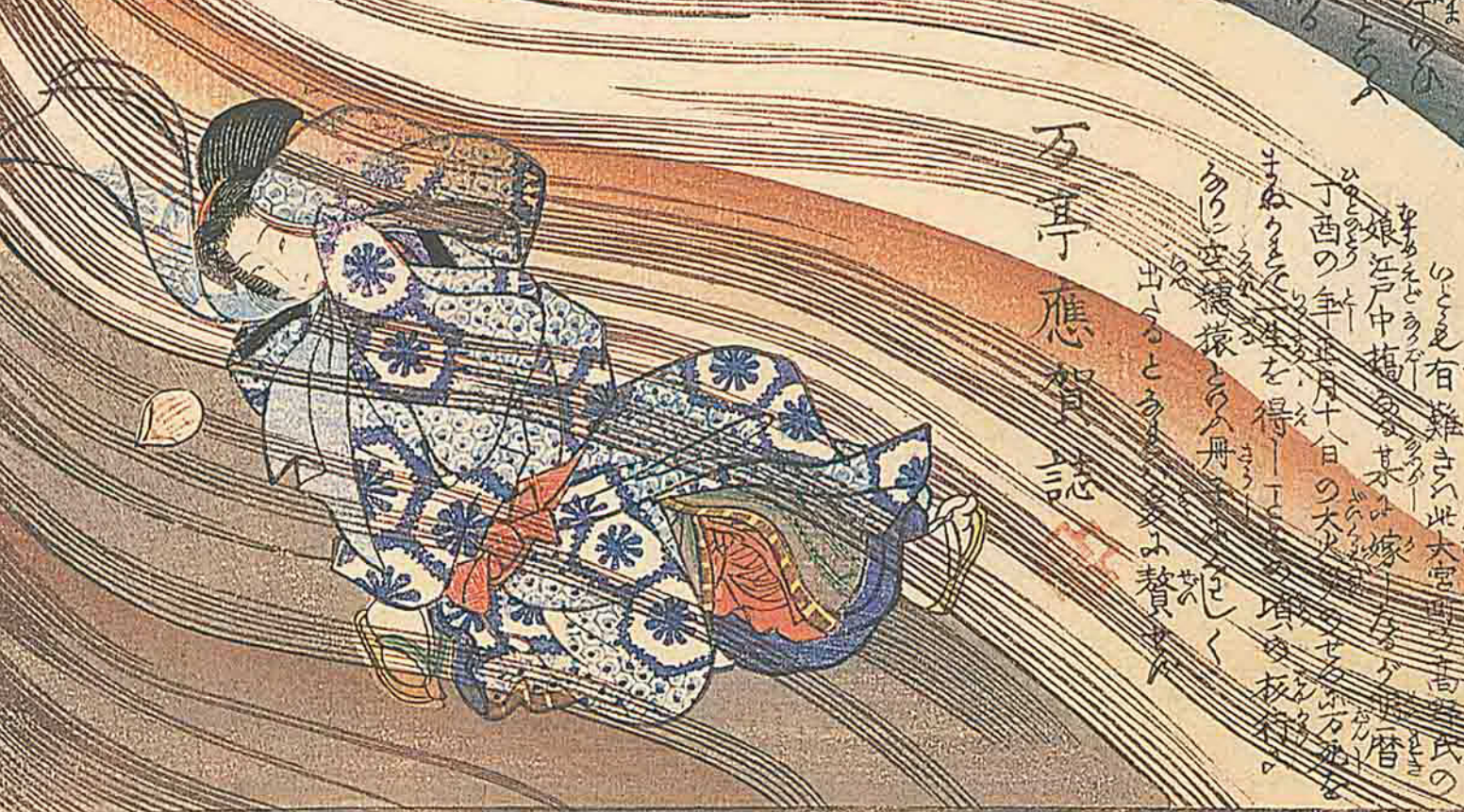


火災の利益



當所日本武尊東國を征りて
時神旗を建ちて所を命じ
旗の下より火を令けり

あやかりて火の下より
當所の寺に建ちて
古より此所
意を叶ふ
地をいふ



万亭應賀誌

いとは有難き此大宮の
御神に御祈りて
丁酉の年十月十日の大火
を蒙りて此所を
まかりて得て
いかに御神の
出るといふ

観音靈驗記



石原宮内



万亭應賀誌

いとは有難き此大宮の
御神に御祈りて
丁酉の年十月十日の大火
を蒙りて此所を
まかりて得て
いかに御神の
出るといふ



觀音靈驗記



士生良門 林太郎定元
東國無双の勇士 士生良門の忠臣
家財を没収せらるる當所
知音のまじりて
其者いさめ失ぬと
同く當惑あつて
かく余義あつて
遠く旅立ちしる
長途の勞まは身の行まを
定めしめしめしめ
あつて三日なつて
共に草葉の
露と消え
跡は三歳の
子と遺り
さう空照と
の沙門を
深くうへて
養ひ育つる
武士はけをんて
觀音は祈りなれりきと
良門は持し出たるふ出合あつて



△あつてる者
子と良門
歎息し吾忠臣の死を
失ふて後又悔ふ今
彼を林源太
提の爲る
塚の傍に二字を建て
定元の性をかく
りて見定林寺
其後觀音を
安置し
順禮の
天地に
あつて

万亭應賀誌

觀音靈驗記



當寺は往昔神社にて大なる榊左右に空小枝を
はさみ給へり門のどくろり
神門のついで其社退轉
跡より上段後段の長里人
を集めて再建を計らるる
まが神樂を奏し
巫女は移りて神託
ありける此地
必神社を建
てて祭祀を
するなり

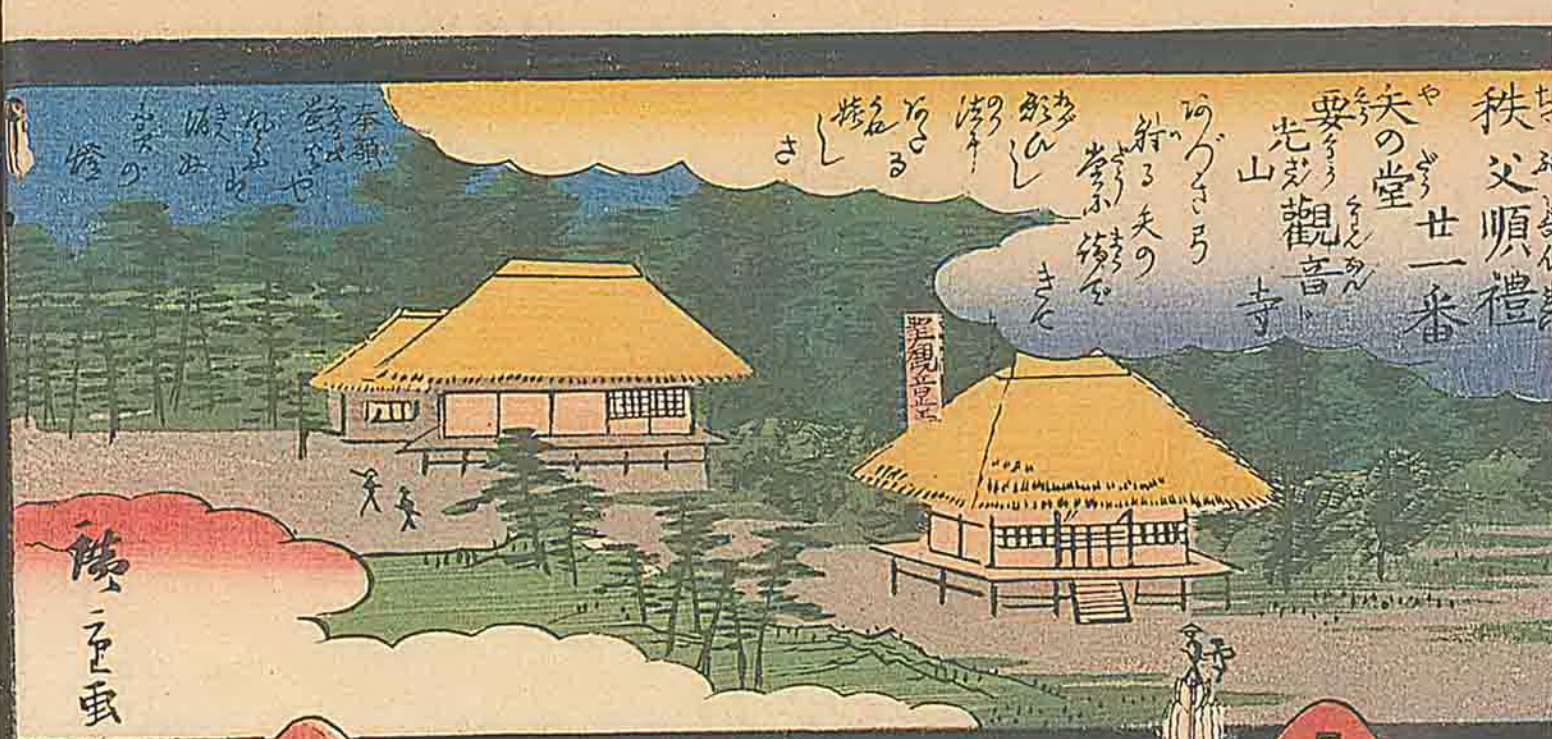
巫女の神託



衆へんと告るふ
よめ觀音の霊場と告るふ
令ふのく和生ゆふと神と佛の水波のへち
西部内證一致にて慈悲深重の誓ひ何ぞ今
るま神を敬ふの必佛を信し七利益を蒙るきめ

万亭應賀誌

観音靈驗記



観音靈驗記



讃州の人化犬

万亭應賀誌



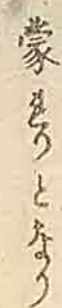
秩父順禮
廿三番
松風山
音樂寺

[illegible]

齊觀
妙
浪
下
小

島山基國
の家来
内山源藏

富山、慈覺大師此処小堂宇を建つ時余多々の
 男鹿來のく道の案内をせし小鹿坂とあり
 誠み絶景の地あり又又又又又又又又又又
 富山基同の家来内山源藏、観音をく信ト
 する時は大内介義弘の討手を基国命ぜ
 りけれまは源藏も出陣の役はあつた武門の
 面目といひのひあつた七十ふちつた老母ふ
 離るこを深くあはれなれば老母は是を
 さらけのあつた此守佛、秩父音桑寺の
 師影ありあはれ懐中にて母をおひん
 くらふ南無大慈大悲と唱へ必を勝利
 わるゝと涙をたらふとびて焼のくもふ
 とさ出陣せし処の守のかげみや
 施き矢さた劍先をのぐと終よ
 我弘敗軍ふ
 のむ基国勝利
 を得て凱陣のく
 之源藏は功成名
 とみて身を退き母
 り終ふのふ出家とある
 観音を供養せし
 るは灵驗を



萬亭應賀誌

觀音靈驗記

陸王虫
秩父ちち順禮じゆんれい
白山しらやま二拾四番
光智山みくにやま法泉寺ほふせんじ



文^{あざ}
てうり
神のさき
もろ
うん
なふ
やう
奉額
花^{はな}
はる
ひん
ふ
ふ

戀
窪沙遊女

富山とやまは越えの泰澄たいじやう毗盧ひろ遮那しゃな佛ぶつの
勸すすめうめうの如賀かの白山はくさんを此こ所ところは勸請こんぎやう



萬亭應賀記



南傳貳山莊板

觀音靈驗記

秩父順禮

二拾五番

久昌寺

岩谷山



奥野の鬼女

昔住人那の岩洞小鬼のまゝりて
りり小住来するものゝ来由ハ
奥野とのみ死ハ
まむ女房



万亭應賀誌

國貞五

觀音靈驗記

秩父順禮廿六番

下影森

萬松山圓融寺

當山を空飛凌ぎ一高山ありて
猶奥院小登りて月宮の柱も
折る可深谷を臨むと森々
や一結清水煩悩の垢を
清め岩上め愛宕金毘羅を
鎮護の神と崇め都に岩寶
小弘法大師の護摩檀石佛
國禪師の座禪石其外諸
神諸佛の尊躰堅固の並
立玉ふ絶景乃靈場也

万亭應賀誌



秩父次郎重忠

當國の住人秩父別當武基が玄孫
太郎重忠此尊像を信大檀那
のついで其子重忠此子重忠と
信し其靈驗を蒙りて今も
奉願
おろろや
あやかし
水のま

廣重

觀音靈驗記



行脚僧 寶明
 天明諸国をめぐりて當山の
 来りて祈難病ふ
 余義かく
 起臥
 西方を
 念ひ飛行
 鳥を見たり
 春秋を送りし
 弘法大師勅を
 受り諸国を
 歴る
 愛み
 未りて天明
 是く當國の
 順礼ゆへ
 万亭應賀誌

万亭應賀誌



大士乃天像を
 刻し与へ玉ふか又宝明△

觀音靈驗記



郡司報蛇身
 昔此村の者頃死しと聞王の前へ往れば一人の
 武を引出し此者を知りてとあつて見ま
 我領主の郡司といふの老生得邪見の
 者又珠ふ散りて散りて大悪を尽
 のう此郡司は安んずる大悪を尽
 めんぐ地蔵の像を毀て無間地蔵ま
 三者ありて赤を這て捕立すふつ
 矢尻をりて二度燈明を燈
 蛇を功徳ふよみ永劫その
 難を免るといふ今より
 蛇身の報をうけ安んずる
 多の是を知らずとて呼ぶ
 う取まといふ声の下に頭死の者
 撫生ると早人等ふと語
 其頃より此霧の海といふ惡龍出て
 人馬を喰ふか又村此堂の祈念
 されば御堂のうちに
 白馬出て



萬亭應賀誌

南傳戴山莊板

觀音靈驗記



秩父順禮 廿九番 見目山 長泉院

龍女



皇四十四代元正天皇の御時此山の麓に淵あり龍女現る
山の麓に夜あり竜燈を捧るより諸人のあやしみ又ハ
傳ふに必ありの今も天佛ありんと湯治しるふ
星霜を過る十余人の順禮きうす此山の
案内をせしめ
の岩屋の口
生れりせざる
の戸をたてし
の衆僧
連押開きた

▲見えの觀音の
像山魏々として
ふふ則ち今の本尊
のより十余人の
順禮に熊野権現
をけりて同行の
貴き推化の
より後年小

萬亭 應賀誌
▲昔受取
置一鏡を
出く
のり
禪師
奇異の
思ひ
そは
者ハ
此深谷より千歳
住惡能ありク
救世尊を信せ善
竜とあり今天生の時
至りとのふ下り忽ち
風雲を起し飛去と
庭前のを竜骨今
小室物とあり又
昔の武家の贈礼和
其外天室あま
萬亭
應賀誌
國分寺 彫竹

觀音靈驗記



秩父順禮 廿九番 見目山 長泉院

唐鏡



當山の開基あり
昔尾易熟田の社人并殿
通夜しる異国の美人
一面の鏡を捧げてのう汝此
鏡を武刃秋父郡深谷の奉納
これ彼地如意輪の霊場あり後年
必その驗ありの時此鏡の像の後光あり
と告ぐ失ぬ社人夢中ふ是を聞て驚きあは
を見ま一面の鏡ありふより是を
持て深谷のありて一人の公卿
渡り戻りぬ斯て元應
元年鎌倉建長
寺の道隱禪
師の唐朝
玄宗皇帝
揚貴妃の
冥福の
自刻如意
輪の像を不空三藏の開眼させ
たの依愛み持まりて本尊とあせしうかの公卿

▲見えの觀音の
像山魏々として
ふふ則ち今の本尊
のより十余人の
順禮に熊野権現
をけりて同行の
貴き推化の
より後年小

萬亭 應賀誌
▲昔受取
置一鏡を
出く
のり
禪師
奇異の
思ひ
そは
者ハ
此深谷より千歳
住惡能ありク
救世尊を信せ善
竜とあり今天生の時
至りとのふ下り忽ち
風雲を起し飛去と
庭前のを竜骨今
小室物とあり又
昔の武家の贈礼和
其外天室あま
萬亭
應賀誌
國分寺 彫竹

秩父順禮三拾番
鷲屈山觀音院
みやうげん
わさ
りく
りく

陳之雲

秩父の重忠
霊夢の告はよのこ
當山ふ田獵をせし
遙の梢ふ競馬の葉ふ
菊まるを見ゆる

萬亭
應賀誌

秩父順禮
般若三拾二番
石船山法性寺

豊嶋權守の娘

當國豊島郡の住人豊島権守一人の娘と
同郡某の嫁せしむ或時彼娘父を里より
かりけりんとて船に乗るるが岸を淵みく
悪魚の目見込て終ふ水底に飛入りし
一人の美女なりぬも其娘を助け舟に
乗せて送りて後者も夢の如くふ
りうあびて何もの者と聞されば
古石船山の者なり姫が父をてり
主従より観音を信むるが父危難
を助けぬりと言つ失ぬこのやを
権守は告ぐに隨喜の涙を流して
利益を尊び其恩謝して諸所を順礼し當
山に來りて御帳をかけ拜されば其娘が
冠りたる笠を着あひて
まのくと立せぬ

冠を脱ぎて、金髪を著るありて
 咸涙を尽し、七三日三夜、
 般若心經を書寫し
 て供養と奉り
 此を識ふ
 或漂流巨海
 龍魚諸鬼
 難念彼觀音力波
 浪不能没の經文有かた
 今も本尊、天冠の久ふ笠を
 着て舟を棹り、多人尊像あり

万
 亭
 應
 賀
 誌



名代の
おん
あやう
ゆき
おの
いばり
ふくろ
奉額
新華乃
水仙花

This is a traditional Japanese ink wash painting (suiboku-ga) or a similar style work. It features a landscape scene with stylized clouds at the top, a blue sea below them, and a yellowish ground area at the bottom right. The composition is dominated by vertical calligraphy in black ink. The text includes names like '名代' (Nadai), 'おん' (On), 'あやう' (Ayau), 'ゆき' (Yuki), 'おの' (Ono), 'いばり' (Ibari), 'ふくろ' (Fukuro), '奉額' (Houkak), '新華乃' (Shinkawano), and '水仙花' (Suiseikwa). There are also smaller characters like 'おん' and 'あやう' interspersed among the larger ones.

秩父 順禮 三拾番 四澤 山 水潛 寺

立
山

樹井露法雨

萬亭應賀誌

天長元年東國大旱魃
五穀勿論人畜草木
脚々法由手を盡す
天はどの雨降きた然る処當山ふきぎの僧一人来りて土民
向て雨を祈る樹井露法雨と書る札を立観音を
信ぜよとさし負ひ教へるかく祈りたるふ三日目ふ
其ま六人余の法師甚々立を着て山の上終岩に杖を
あぐらをして岩を突は忽ち水涌出て滝のへそ流る其
里人亦喜ぶ是を告む彼法師を敬ひて吾等余勿と
巡りて此吳地に至る此所百番順礼の結願所とせば
今茲必西國をゆるぎて阿弥陀をむき坂東へて
びと東方の某師をむき此観音とむき之則
百番とむき吾杖指を納むるのち必熊野
権現をてめあむる権現来るがま心
をてめあむる今を雨降とふより早く
失ふに由る法雨忽ち降りて衆生の命助る
其六弥尊の札立峠の名も茲み給ふとふ

曲多回包

商傳貳山左額

秩父順禮
三十三番
小坂
下

延命山菊水寺

楠正成

當寺首より今に御堂より
已の方より立ち上り隔ちて
久崎とのみ所より
山崎頭の人より
住持の中人より
此盗人修
行基より
此はあやうき
僧となる世の後一人の
修来り今今に御堂へ御堂を
修し長壽の天験をうく
正成る普く觀音を
信トるあつみ當寺の
水寺と号せむ吾家の
後縁あるとを殊に信ト常
行しを内々赤坂の城に籠りし
旅のきき針策を城を落し
寄手小僧を落し長崎四郎左門の馬屋の
前を忍び通し敵ち見分て何者あれバ
役所前を案内もなく通ふと外見られバ
其大將の御内の者とのひく是をやみ
行過されバ中より者あり取逃せんと
其手のひの文より近く射つる失

萬亭應賀誌

國史館

正成の臂は
 痛みも
 其場を
 幸く免さる
 後日脱身
 離れぬ観音
 住と云ふ
 見よ
 一心称名の
 二分の功
 小交の根
 居さる
 予が
 其験あり

3402



世尊
法身
舍利

受入
41.1.12
東京国立博物館

